

藤田至則先生のご逝去を悼む

高濱 信行



新潟に馴染みが深い、藤田至則先生が10月14日に食道癌のためにお亡くなりになりました。享年82歳でした。

藤田至則先生は、大正12年千葉県山武郡鳴浜村（現成東町）でお生まれになり、東京青山師範学校、東京高等師範学校を経て、昭和23年に東京文理科大学地質鉱物学科を卒業されました。卒業後は母校（昭和28年からは東京教育大学）の地質鉱物学教室で副手、助手、助教授、教授を勤められました。昭和52年に新潟大学理学部地質鉱物学教室の教授として招かれ、翌昭和53年から新設された同大学積雪地域災害研究センター（略称・災害研）教授に移られ、

創設期のセンター長を計3期6年勤められ、災害研の基礎を築かれました。この間に多くの地質学徒の教育にあたられました。

学会活動としては、日本地質学会評議員ならびに執行委員、日本学術会議地質学研究連絡委員会委員、同国際地球観測年特別委員会委員、同災害問題特別委員会委員、災害科学会評議委員、地すべり学会新潟支部長などを歴任され、広く学界の発展に尽くされされました。

先生のご研究は、多技にわたりますが、とりわけ日本列島の新生代地質構造発達史の解明のために偉大な貢献をなされています。グリーンタフ変動、島弧変動の研究で陥没盆地の発生をはじめ、独創に富んだ貴重な成果を多数の著書、論文で公表され、そのご功績によって昭和48年に日本地質学会賞を受賞されました。さらに、新潟大学災害研に移られてからは、地すべり、土石流、地震など自然災害の研究にも力をさかれ、この分野でも「液化側方流動」をはじめ多くの独創的な成果を発表されました。

先生は、常に野外における事実を何よりも大切にされ、それをもとにしての仮説の発想と検証に全力を尽くされました。「地質学はフィールドから。自分の目と頭で。フィールドが教師」、「本物の地質学でないと（社会で）役立たない」、「現場主義だ」など、折りにふれて話されました。

もう1つ、先生のお仕事の大きな特徴は、終始団体研究を実践され続けたことにあると思います。先生のご指導によって、房総団研、本宿団研をはじめ多くの団体研究が大きな成果をあげました。それらは、研究面での成果に加えて、同時に大学の枠を超えた若手の教育・育成も進められ、現在、団体研究で先生に指導された多くの方々がさまざまな分野で第1線の活動をされています。

*新潟大学積雪地域災害研究センター

先生の率直で飾らない、また「豪快で繊細」、「厳しく、暖かい」お人柄は多くの人が共通して抱く先生の印象であろうと思います。人間味あふれる面白いエピソードにも事欠きません。フィールドでのコンパの最中に姿がみえないので探したら、風呂で「大の字」になって寝ていた「ほくは風呂が好きなんだよ」。また、奥様から伺った、休日に家をでられてから自宅に電話が入り「ところで、今日ほくはどこに行くんだっけ？」という話には啞然としました。

私は、先生が新潟に招かれて以来の30年あまり、公私ともに親しく指導していただきました。新潟、国内、海外で先生のお伴で歩いたフィールドのこと、二人で二日酔いの頭を抱えながら歩いたこと、叱られた時も、励まされた時も文字どおり親身になって接してもらったこと、などが思い出されます。最後にお会いしたときもフィールドの話と私の家族を気づかって頂いた話でした。

先生のご遺志で、遺体は鶴見大学に献体され、葬儀は行われませんでした。心からご冥福をお祈り申し上げます。

なお、奥様の藤田智恵子様は下記にお住まいです。

〒214-0023 川崎市多摩区长尾 6-19-8